

聖書箇所：第一サムエル記 30章 11～20節

説教題：すべてを取り戻す神

1 「必ず救い出すことができる」

ダビデはペリシテ人の地に逃げ込みそこで生き延びることはできましたが、あるときイスラエルとペリシテ人との間に戦いが起きてしまいます。ダビデは難しい立場に立たされました。ペリシテ人の側に就けば自分の身は安全ですが、同胞イスラエルを殺すことになります。かと言ってイスラエルの側に就こうものなら、今度は自分が殺される。窮地に追い込まれたダビデは神に助けを求めて祈ります。そうしたら、ペリシテ人のリーダーたちがこう言い出したのです。「おまえは何をするかわからないから、自分の村に戻ってじっとしている。」

こうしてダビデは窮地から脱出しました。その時こんなふう思ったはずです。「神は祈りに答えてくださった。神は私たちの味方だ。」ところがそのすぐ後で何が起きたか。村に戻ってみると、家は火で焼かれ、家族全員が盗賊に連れ去られた後でした。怒りに燃えた仲間たちはダビデを恨み、殺そうとまで言い始めます。

ダビデは非常に悩みます。ダビデにしたら選択肢は一つしかありません。敵を追って家族を取り戻すこと。でもまったく勝算はありません。もし取り戻せなかったなら、ダビデは仲間に見殺されるでしょう。そのときダビデは神に祈りました。「あの略奪隊を追うべきでしょうか。追いつけるでしょうか。」神は答えます。「追え。必ず追いつくことができる。必ず救い出すことができる。」

こうしてダビデと六百人の部下たちは家族を取り戻すために、略奪隊のあとを追うことにしました。それが前回家までのあらすじです。

2 ひとりのエジプト人

(1) 「おまえはだれに属しているのか」

村が盗賊たちに襲われてから数日が経過しています。そのあとを追おうというのですからかなりの無理をすることになる。六百人のうち二百人はベソル川を渡ることができず、そこで脱落します。残る四百人は川を渡ることができましたが、敵の足跡を見失ってしまいました。体力は限界に来ています。闇雲に荒野を探し回るわけにはいきません。壁にぶつかってしまいました。

そとき、一人の若者が荒野の中で倒れているのを発見します。聞けば、自分たちの村を襲った盗賊の仲間だと言います。この若者にダビデはたくさんのごちそうを振る舞います。捕虜になった若者の警戒心をとかし、敵の居場所を聞き出すためのよう見えます。若者が満腹したところで、ダビデはおもむろに質問を始めます。

13節。「おまえはだれのものか。どこから来たのか。」この若者のことをよく知ろうと思ったのでしょうか。でもこのダビデのことば、それだけではない。よく見ると、そのまま私たちにも向けられた質問にも聞こえるのです。

まず「おまえはだれのものか」から考えま

しょう。直訳すれば、「おまえはだれに属する者なのか」となります。この質問に対し、若者は、「私はエジプトの若者で、アマレク人の奴隷です」と答えてから、自分が病気になること、主人に棄てられたこと。その結果、荒野に取り残されてしまい、もう少しで死ぬところだったのだと明かしました。

今の日本には奴隷制度は存在しません。ですから、「おまえはだれのものか」と問われても、「私は〇〇主人の奴隷です」と答える人はいません。でもほんとうに私たちは奴隷でないと言い切れるのか。そのことはまた後で触れることにします。

(2) 「おまえはどこから来たのか」

ダビデの二つ目の質問はこうです。「おまえはどこから来たのか。」この質問に対し、若者は自分はエジプトの生まれであることを告げてから、いままであちこちの村を襲い、火で焼き払い、人々を連れ去り、財産を奪っていったことを正直に話します。確かにこれはひどい犯罪です。奴隷だから仕方がなかったとは言いかねるかもしれませんが、しかしやったことはやったことです。

さてこの質問が私たちに向けられているとしたら、どう答えるでしょうか。多くの方は言うでしょう。私は市民として税金を払い、法律をきちんと守ってきました。犯罪なんかとんでもない。

しかし、聖書がいう罪とはそんなことではない。例をひとつ挙げます。皆さんはこんな経験をしたことはなかったでしょうか。夫に対して、あるいは妻に対して、あるいは友人に対して、伝えなければならぬ大切なことがあるのにそのことを黙ったままにしていた。つまり隠していた。うっかり忘れてとい

うことなら問題ではない。積極的に隠そうとしたかどうかです。なぜ隠すか。都合が悪いからですね。伝えるべきことがあるのにわざと伝えなかった。あなたはそんなことはしてこなかったですか。そう問われて、清廉潔白な人はいるのでしょうか。

そんなことを言う自分はどうか。「おまえはどこから来たのか。」「岩手の出身です」と言うところまではよいが、過去にやってきたことと言えば恥ずかしいことばかりです。自分が不利にならないように、少しでも有利になるように、そんなことばかり考えて、言うべき事を言わなかったことは数多くあります。いまだって、とっさの場合に頭の中に浮かんでくることはそういうことです。

聖書で「ないしょにする」ことを何と表現するか。「心を盗む」と言います。伝えるべきことをわざと伝えない。それは、ほかの人の心を盗むことになる。モーセの十戒の八番目に「盗んではならない」とありますから、隠し事はりっぱな罪なのです。

イエスはこう言っています。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。罪を行っている者はみな、罪の奴隷です。」(ヨハネ 8章 34節)

「おまえはだれに属する者か」と問われれば、私は表向きりっぱなことは言えます。「中央教会の牧師です。」しかし自分のしてきたことを問われれば、「私は罪という主人に属しており、罪の奴隷という身分です」と言わなければならない。目に見える奴隷制度はなくなりましたが、霊的には私たちは生まれながらに奴隷だった。

そんな私たちはいったいどうしたらよいのでしょうか。それを見るために、この奴隷であった若者に焦点を当てて考えていきます。

3 神はどのように救いのみわざをなすのか

(1) 約束をなしとげる神

ダビデがまだ村にとどまっていたとき、神はこう言ってダビデを励ましました。「追え。必ず追いつくことができる。必ず救い出すことができる。」

そうは言われても、実際に追いかけてみると、途中で敵の足跡を見失うという大ピンチに陥りました。もしも、あのとき奴隷の若者を捕虜にできなかったなら、ダビデはだれひとり救い出すことはできなかったでしょう。こう見れば、神がこの若者をダビデのところに運んでくださったことは疑いの余地はない。神はこのようにして約束されたことを確実になしとげてくださった。そしてすべてのものを取り戻し、救いだしてくださる。そのような約束がここに書かれています。確かにそのとおり。でも、それがすべてなのでしょうか。

聖書はもっと豊かなことを私たちに教えています。

(2) キリストの心で

皆さんはここを読んで、この若者がなぜ正直に自分のしてきた罪を告白できたのかと不思議に思わなかったでしょうか。単純な性格だったので、先のことなど考える知恵がなかったということか。いいえ。この若者、ダビデと駆け引きをしているくらいですから、それ相当の知恵を持っています。きちんと周りの状況を観察し、これを言っているのか悪いのか、判断して語っています。

若者は何を見たのでしょうか。ダビデです。ダビデの顔を見て、この人の前なら正直に

言っているかわかりました。ダビデは心の底から自分のことをあわれんでいると知りました。ほとんど度を超しているのではないかと思うくらいたくさんの食事を与えてくれたのは、全部ダビデの心だとわかりました。この人は、自分の過去に犯した罪を責めようとはしていない。だからそのままありのままのことを言えました。

この若者が、敵の居場所を教えるからどうか自分を殺さないでくれ、主人のところに追いつき返さないと神に誓ってくれと願ったとき、ダビデはそのまま受け入れます。このようにしてこの若者は奴隷の身分から解放されていきました。この若者はダビデの手で救われたのです。

いつも繰り返しますが、ダビデの姿からイエス・キリストの姿が浮かび上がってきます。ダビデがこの若者にしたこと、そのまま同じことをイエス・キリストは私たちにしてくださると語りかけています。

(3) ひとりの罪の告白が多くの人たちを救っていく

最後にもう一つのことを確認します。ここではどんな順番があったのでしょうか。まず奴隷であった若者が救われました。救われた若者の道案内があったので、次に多くの人たちが次に救われていった、そんな順番でした。これは何を教えているでしょう。

私たちは、救いというときわめて個人的な出来事と考えがちです。「〇〇さんが救われてよかったね」と言うとき、頭の中では救いを信じた方の顔が浮かびます。

ところが今日の箇所を読むと、この考え方を少し変えなければならない。もしも誰かが「私は主を信じます」と告白し、救いをいた

だいたなら、私たちはその人ひとりだけを思い描くのではない。この人に続いて多くの人たちが救われていく。そのことを思い描くことができる。それが神の救いのわざなのだと思える。

誤解のないように言いますが、救われた者は、まだ救われていない人をがんばって教会に連れ来なければならない。そんなことを言おうとしているのではない。

この若者は何をしましたか。たったひとつです。自分のかつての主人の居場所をダビデに教えただけです。ダビデもわからなかった知識をもっていた。その知識を伝えただけ。それで多くの人々のいのちが救われた。

これが神の救いの方法です。私は何もできないと悔やむ必要はありません。ちっぽけな自分は何の役にも立たない思う必要はない。あなたはあなたのままでそのまま無理をしないで生きていけばいいのです。自分では気がつかなくても、神が知ってくださっている。最もよいときに、最もよい方法で、私たちが持っているものを用いてくださる。それが神の救いの方法です。

多く的人是を考えます。私たちががんばって多くの人を救いに導かなければ、その思いは大切です。でももっと大切なことがある。神はすべてのものを用いて人を救いに導くのです。私たちの努力ではない。

神は何を用いるのでしょうか。今日の箇所を見てください。この若者の罪の告白です。自分のしてきたことをそのまま神に申し上げていく。驚くことに、その告白が多くの人の救いにつながっていく。

神の救いの方法は私たちの思いもつかない不思議に満ちています。御名をほめたたえたいと願います。